令和３年度岐阜県博物館協議会議事要旨

１．　日時　令和３年 12 月３日（金）１４：３０～１６：００

２．　場所　岐阜県博物館　講堂

３．　出席者

古川　秀昭　　前岐阜県美術館長
江原　由佳　　岐阜県ＰＴＡ連合会母親委員
小川　釼子　　前岐阜県博物館友の会副会長
春日井恵子　　大垣市立静里小学校校長
亀谷　みゆき　　朝日大学経営学部教授
清水　博孝　　公募委員
河井　洋子　　中部学院大学・中部学院大学短期大学部付属桐が丘幼稚園園長
杉山　博文　　岐阜女子大学理事長
鈴木　薫　　ＮＨＫ岐阜放送局長
山田　伝夫　　中日新聞岐阜支社長

４．　開会

（１）　開会

・12 名中 10 名の出席により、本協議会は成立。

（２）　館長挨拶

５．　議事要旨

（１）　会長挨拶

12 月になると慌ただしい気持ちになる中、参集にお礼。
博物館美術館は、こうしたときこそ休館せず、あらゆる感染対策を取りつつ家族に来館していただく時であると主張し、新聞社にも取り上げてもらったが、休館せざるを得ない状況は残念。
誰も予想できない状況、何が正しいかわからない中、博物館独自の脈々とした活動を継続していくことを期待。これから、活動報告、これからの予定ＤＸへの取組について説明を聞き、皆さんで実りある協議を。

（２）　県博物館の現状と実績について

「岐阜県博物館の現状と実績」、「博物館機能の全県展開」（資料１－付図）、「岐阜県博物館の現状と展示データ」（資料１）の資料を使って説明。

（３）　県博物館の現状と実績への質問と意見

（清水委員）
　イオンモール各務原の連携事業の開催場所は？
（事務局）
　2 階の無印良品前
（小川委員）
　「せきてらす」が新規オープン、会場も広いので博物館でも利用があるとよい。
（古川会長）
　マーサとの連携が続いているが、ああいう人出が多い場所で、思いがけず博物館のブースがあるのはよい。
（事務局）
　現在改修中で博物館ブースはないが、継続予定、引き続きよい関係を築きたい。
（清水委員）
　高山との連携は？
（事務局）
　まち博で毎年展示。
（清水委員）
　ボランティアの件、まる１日、お手伝いすることになる、以前はお弁当・お茶が出た、できたら簡単なものでよいので考えてほしい。
（古川会長）
　駐車場無料になって随分になるが知らない人が多い、無料をポスター・チラシで告知すべき、誤解されている方が多い、まだ印刷物に表記したほうがよい。
　各委員は意見があれば後で。
　今日のメインの議題となる「博物館とＤＸ」について、事務局から報告を。

（４）協議事項
　資料２：博物館と DX（デジタルトランスフォーメーション）
（事務局）
　岐阜県博物館におけるＤＸの現状を報告。
　リアルを見る事への理解意欲が失われるという懸念があるが、博物館では、リアルを経験したいと思う呼び水としてＤＸ推進。
　取り組み例として、①リモート授業、②リモート講演会、③館内ストリートビューの 3 事業を紹介。
　①リモート授業
　社会科・理科では、博物館の積極的な利用を求められているが、適切な施設がなかったり、コロナで学外活動自体を取りやめたりしている状況下でリモート授業を実施。
　具体的には教室と博物館をタブレット端末でつなぎ、小学校 6 年生「大地のつくり」を双方向やりとり、博物館展示物を実際に見せながら、解説員の解説を中継したところ、単に動画を流すより臨場感のあるサービスが提供でき、博物館の物的・人的資産の有効活用ができた。

②リモート講演会

昨年度から今年度にかけて臨時休館などで、複数回の催事を中止せざるを得なかった。日程の延期で対応したものもあるが、講師都合で延期不能の場合、講師の許諾を得て、リモート講演会を実施。

講師は京都から講演、参加者は自宅から視聴するという形式で実施。

アンケートによれば、「内容は伝わりましたか」77%充分伝わった、13%まあまあ伝わった、「リモート形式は」参加しやすい 6 割、変わらない 2 割という回答を得て、リモートでも実施可能であることがわかった。

反面、博物館へ足を運んでもらう機会が喪失（実際、この催事を報じた記者は来館していない）

今後のリモート講演会の活用としてはどうすべきか整理を進める必要がある。

③館内ストリートビュー

Google 提供のサービス、地球上の各所を、まるで実際に歩くように見せる。

屋外は Google 撮影、屋内は Google へ提供、博物館では今回、本館 3 階（自然展示室）を撮影、ＨＰのおうちミュージアムにリンクを作ってある。

全方向へ移動、ズームアップなども自在、実際に来たいという意識の掘り起こし、来館機運の醸成が目的。

今後の展開方針

①YouTube 動画（通常、本館で定時実施している解説員の解説 5 分程度）の配信：撮影済みで現在編集中、順次、配信予定。

②収蔵品のデータ化：未展示を含めて収蔵品の中から数点を 360 度撮影。

③恐竜ＶＲコンテンツの制作：博物館のキラーコンテンツの一つである恐竜を魅力的に提示するため VR 技術を使って仮想空間で見せる。

以上、博物館の魅力的コンテンツのＤＸによる発信を計画中、県博の取組について、または、一般論として忌憚ない意見を。

（古川会長）

コンテンツ制作は委託か？

（事務局）

3 年前ぐらいまでは委託するしか手がなかったが、今年は機器購入して職員が臨時休館中に撮影、Google にアップした。

高額でない機器で撮影可能。

職員が、セルフタイマー機能を使ったり、カメラを持って歩きながら撮影。

（古川会長）

業者がやらず、自分たちで？　なかなかですね、委員のみなさんご意見を。

（亀谷委員）

DX については、高等教育においても大きく進んでいる。

初等中等教育では一人 1 台タブレットが進んでおり、岐阜県は全国的でも 1 番という中、博物館は本物と児童生徒をつなぐ取り組みを、より一層進めてほしい。

博物館のＶＲや、ストリートビューについては、ぜひ進めていただきたい。例えば大学でもこの１年半はリモート授業、講師として招かれた講演会も zoom での開催となるなど、発信者として画面越しでもどのようにしたら、いかに熱量を持って伝えるか、を考えている。

コロナ感染が落ち着いてもこの傾向は進み、高校生対象の英語スピーチ全国大会をオンラインで行うことによって北海道から沖縄まで全国から高校生を集めることができた。

博物館についてもコロナが収まっても、逆に、オンラインだからこそできることを期待する。一方で、年齢的だったり、通信環境だったり、アクセスできないなどのデジタルについての格差にも配慮してほしい。

オンラインだからこそできることに目を向けつつも、対面とのハイブリット形式も考えてほしい。例えば講演会を博物館で実施し、自宅でもオンラインで参加できる、というような形式で、是非検討してほしい。

（古川委員）

マスコミの観点ではどうですか？

（山田委員）

説明を聞いてこういう時代かと思った。

メディアといっても新聞社は大きい顔をできない。新聞社内でも取り組み実施中。

気を付けているのは、年寄りは口を出さない、若い人の考えでとにかくやってみるということ経験からものを言って若い者を黙らせていたが、いまは経験では太刀打ちできない、知っているか否か。

新聞社がいま苦労しているのは、読者がわからないということ、以前は百貨店と同じで、オールアラウンド、流行りの歌謡曲と一緒で、全世代が同じ曲を好んだ。

いま、新聞の読者は 50 代以上、40 代以下は新聞ではない、影響力がない。

40 代以下は、ネットや SNS でニュースを読むマスコミュニケーションがない状況。

博物館に提言したいのは、いまのような取り組みを、どういう人を想定して取り組んでいるのか、想定した相手に対して、例えば、小学生から真摯に意見を聞くのがよい。

我々ではこれがよいと思っても、受け止め方が違うかもしれない、年配の方はどういう受け止め方をされるか、意見を聞く、作り手の理論は必ずしも受け手と違う。

（古川委員）

ＤＸのターゲットは誰で、リアクションはどうか？

（事務局）

講演会について、予約されている方にリモートに変更した案内をすると、参加者が 2/3 に減少（環境がない、難しそうという意見）

一方、終了後のアンケートでは、初めは難しいと思ったが意外に簡単だった、画面が見やすかった（会場だと遠い画面が手元で見える、音声もクリア）という意見をいただき、結果、伝わりやすかった。

これを踏まえ、ハードルを乗り越えれば有効な方法だと実感し、かつ、乗り越えるには高齢者への配慮がまだ不足と感じる。

小学生について、小学校での複数の実績によれば、先生によると子どもたちの反応はよい（見たいものが見える、質問できる）双方向だから、子どもたちの要望に対応できるから。

実際に来館できるのが一番だが、双方向でも成果が出せる。

学校側の体制（タブレット、大型モニター）が整っていることも大きく、こちらの体制が整えれば対応できる状況になっている、2～3 年前と比べると進んでいる。

（古川会長）

博物館のターゲットとして、学校団体のほか、50 代以上の高齢者・壮年層への対応はどうか、生涯教育の観点として。

（事務局）

既存のサービスをやめるのはできないので、いまのサービスを続けながら新しいサービスを模索している。リモートで便利になりすぎると博物館に足が遠のく。リアルで来館者にも配慮すべきという観点でハイブリットの方向性、即ち遠方の講師のリモート講演会を博物館で受講することで、講師は来館しなくても講演会は実現できる。

イベントの受付は電話とネットの両方を行っており、電話受付はやめられないと考えている。高齢者の切り捨てになるから、両方残して、両方対応していく。

（鈴木委員）

おうちミュージアムを見てみたところ、充実したコンテンツで、とくに YouTube 動画の学芸員の解説は面白いと思った。幅広い収蔵品と専門性がうかがえ、見た方たちのコメントが見られるのもおもしろい。

HP のトップページから入って、おうちミュージアムにたどり着くのにプロセスが必要。（トップページ＞インフォメーション＞おうちミュージアム）

おうちミユージアムへのプロセスが短くなると、見つけてもらいやすくなるのでは。

小学生などこのページまで誘導されて来る人以外、興味のある人に自分から見つけてもらうには、わくわくするような、中高生にもアピールするような、派手なデザインが必要ではないか。

おうちミュージアムは複数館で共同運営していて、そこから世界の広がるよい取り組みだ。

（春日井委員）

小学生の学校現場から参加、小中代表という立場、学校側からお話ししたい。

ＤＸは、学校にとってもまさに旬、子ども一人 1 台タブレット、大型モニターの配置などが進んでおり、教員もオンライン会議に慣れている。

先日は、地域商店の見学を直接訪問できないので、zoom で実施した。

学校では、学習指導要領に沿って授業を実施しており、1～2 年生は生活科の勉強で博物館を利用しやすく、雨天も対応してもらえるのでよく利用するが、3～6 年生はあまり利用がない、というのも、バスを使っての学外勉強は 1 年に 1 回しかなく、博物館がいくら宣伝しても、学習内容に合わないと来館機会を持てない。

学校から出なくてもオンラインで利用できれば利用しやすい。

勤務校であれば、4 年の学習に関わって、岐阜県や大垣市の「水辺の生き物」について、博物館学芸員がお話ししてもらえればありがたい。

一般的な学習内容はＮＨＫなど既存市販ソフトが、よくてきていてよく使う。

自分たちの地域のこと、自分たちに関ったことを扱ってもらえると利用したい。

博物館がオンラインでできることを提案してほしい、ヒットするものがあれば教員は使う。

一般の方は、子どもたちは博物館に一度来ると、または、オンラインで一度利用したら、博物館に来ないと思っているが、子どもたちは家庭で話して、リピートする、今後は保護者と来館する。

子どもたちはオンラインでも学校を通じて博物館に触れるとリピーターになる。
多忙な学校教員でも利用したくなるように工夫してほしい。

（江原委員）

うちの子は中学生を卒業してしまい、いま、仕事はほとんどオンライン。
うちの子どもたちは、博物館に行く学年がひとつもなかった。
市教委・学校と博物館の連携、働きかけがどうなっているのか、わからないが、せっかくなので博物館利用の機会を設けてほしい。
ほぼオンライン授業で、子どもはオンラインに慣れている、オンライン博物館利用が訪れるきっかけになる。
ここに来るとこれが見られると、アピールするとよい、中学生ならスマホを持っている子も多く、興味があれば自分でキャッチする。
ストリートビューについて、せっかく紹介するなら、インスタをやっている高校生も多いので、インスタ映えする撮影ポイントをプログラム中で演出して見せるとよい、来館のきっかけになる。
YouTube 番組について、長さが重要で、料理番組の例だと、１分で長いと感じる人もいる。
せっかく説明するなら、見る人が興味を持続できるように、長さに配慮を。

（古川会長）

PTA 連合会母親委員とあるが、父親委員はいるのか？

（江原委員）

いない。最近、母親と名前の付く役職は減ってきたが、この場合、父親は PTA 会長と母親代表という立場。

（古川会長）

ＤＸが進めば、不便な立地で来館が大変という弱点が減る一方、展示物に達するまでのアプローチが省略されて、展示空間の、作品の間の歩く体験、ちらちら見えるという感覚や、公園や屋外彫刻など、予期せぬものとの遭遇が失われる。
ダイレクトに見たい、ほしい情報に直結できる一方、余裕がなくなることに不安を覚える。

（河井委員）

すぐそばの幼稚園、子どもたちが気軽に来られる。
先日も博物館に来館、大喜びで、秋見つけに参加してきた。
子どもたちは、こちらが意図するものとは別に、興味があるものを切り取って見ていく、ひとりひとり違う。
楽しかった、話したい、と思わせるよさがリアル、足を運ぶと発見がある。
意図したもの以外の発見、すばらしさを大切にしつつ、来てもらうためのＰＲ、広く知ってもらうためにどこにピンポイント、クローズアップするか。

（清水委員）

全県展開について、人出は足りているのか、人員配置は増えるのか。
博物館までのアプローチについて、高齢者には遠すぎる。
南入口からのアクセスに、マイクロバスでもあれば、公園の中の博物館としてもっと宣伝できるのでは。
リモート講演会について、お客さんが見えると講師もはりきって話すし、YouTube 配信だと、果

たして見てもらえたかわからない、個人的には好きではない。
収蔵品のデータ化について、データは正確を期し、専門家にきちんと監修を、
ＤＸは時代の流れだが、まだまだ立地を大事にして考えてもらいたい。
団体入口までの階段を利用してコンサートなど、人を呼ぶ仕掛けを。

（杉山委員）

一番博物館に来ないのが大学生、県博でも入館者では一番少ないのでは？

（事務局）

課題を与えられて来る場合はある。

（杉山委員）

確認したいのは、冒頭の報告にあったようにまだ人数にこだわっているということ。
リモートの時代、人数というよりアクセス、これも数になるが、数よりも内容の評価はどうするか、
博物館が社会学習機関の一つであれば、県内小中校の学習レベルが上がれることが博物館の評価数に惑わされてはならない、コロナ禍、岐阜市の鵜飼の観覧者数が減っても価値はある、人数に惑わされないように。
子どもたちはデジタルに非常に近い、高齢者の次にデジタルに疎いのが、小中高大の先生、デジタルを活かしきれない。
博物館をいかに見せるかを紹介するのは先生、先生方を教育せねば、効果が上がらない。
そのためには、教員免許更新が、23 年度からは各県教委に委ねられるので、岐阜大とタイアップして免許更新の一部単位に資料活用を新設したら、博物館美術館を利用せざるを得なくなる、手っ取り早い方法だ。
博物館がなくてもよいとなると問題、博物館は単なる収蔵庫ではなく情報発信の基地、小中校といかにパイプを持つかが重要。

（古川会長）

以前、能装束（寄託資料）を県博から借用してドイツで展示した。
県内の指定文化財の研究者が県内にいない＝県内の優れた文化財の研究は東京・関西の研究者がやっている
県博の活動の中で将来研究者になろうと志を持てる、意欲・チャンスを起こすべき。
データのつくり方もそういう意味で、刺激的な構成を考えてほしい、期待したい。

（小川委員）

素晴らしい里山の公園が余り手入れされていないようで四季折々の移ろいが感じられないような気がする。博物館や公園を訪れる人が心の安らぎを感じられるような風景がほしい。

（文化伝承課）

博物館担当課として参考となる多数のご意見を伺えた。。
DX は、県民文化局でも、目指すべきはハイブリット型 DX とうたっている。
発信が容易になって、受け手の環境も整備された一方で現場に来ていただきたいという現場職員の思い、発信するときにどうすれば現場に来てもらえるかは課題。
来館してもらう仕掛け作りが大きな課題で検討中、今日の会議などで意見をいただき、よりよいものにしていかねばと改めて感じた。

６　その他の報告事項について

事務局より令和４年度博物館展覧会計画について「令和４年度岐阜県博物館展覧会計画」（資料２－１、２－２）を使って報告。

７　館長挨拶

８　閉会